

認知症高齢者及び障害者の地域生活支援に関する研究～生活機能の評価法の開発～

最終更新日：2015年8月15日

特別支援教育講座
教授
中村 貴志

キーワード

認知症・視覚障害・歩行・姿勢制御・眼球運動・心拍変動・認知症予防・転倒予防

研究シーズの説明 (私は、このような研究に取り組んでいます。)

これまでの私たちの主な研究: (1)アルツハイマー型認知症の歩行障害のメカニズム、(2)認知症進行や転倒の予測に有効な歩行評価の方法、(3)認知症高齢者の生活行動と支援環境との関連、について研究を進めてきました。(1)の研究結果、アルツハイマー型認知症の脳画像と歩行・平衡障害との関連から、前頭葉と大脳基底核の血流低下や深部白質病変の関与が大きいことを指摘しました。(2)の研究結果、認知症高齢者の場合、健常高齢者と比較して転倒率が有意に高いこと、歩行機能の評価指標として、ストライド長の時間的・空間的変動性が歩行の「安定性」や転倒、認知症の進行の予測に最も有効であることを報告しました。(3)の研究結果、「介護者との散歩や買い物」と「徘徊」が同じ歩行運動量であっても、行動ごとに心拍変動解析を行うと、意図や目的のある歩行か否かによって、歩行開始直前の交感神経の反応に違いが認められ、生活行動の質の違いを評価する指標となりうる可能性を示唆しました。

現在の取り組み:福岡県北九州市や田川郡福智町、佐賀県伊万里市の研究フィールドにおいて、地域の行政、保健・福祉・医療機関の皆さんのご協力のもと、軽度認知機能障害がある高齢者の健康維持と地域活動の継続のために必要とされる歩行機能に着目し、この総合的な評価システムの開発と臨床応用を試みています。

成果の応用可能性 (私の活動の成果は、このような分野にこのように貢献することができます。)

1) 研究の成果は、認知症、軽度認知障害がある高齢者及び障害者の地域活動の継続と、QOLの向上を支援する地域包括ケアの推進へ寄与できるものと考えています。

2) 具体的には、認知症への初期対応が求められる医療機関、地域包括支援センター、認知症初期集中支援チーム等が有機的に連携し、支援機能を十分に発揮するために必要とされる対象者のアセスメントツールや情報共有・連携シートの開発と活用につながるものと考えています。

3) さらに、共生社会実現のための「まちづくり」にとって、不可欠な基礎資料を提示したいと考えています。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

1) 西九州大学先端認知症臨床研究所のプロジェクト研究として、佐賀県伊万里市の研究フィールドにおいて、地域在宅高齢者の生活機能に関する継続的な調査測定を行っています。

2) 2015年度より、福岡県田川郡福智町の認知症地域支援推進事業の一環として発足した認知症予防研究・研修センターにおいて、連携研究を開始しました。

3) 2012年度 厚生労働省「北九州在宅医療連携拠点事業」の一環として、北九州市において「認知症の地域支援を考えよう」というテーマで研修会を開催しました。